

イギリス小説と批評の研究

原 英 一

以下は、2013年度に国内で出版されたイギリス小説関係の書籍約30冊を通読した結果のまとめである。完全に網羅しきれてはいないかもしれないので、遺漏があればお許し願いたい。イギリス小説関係という範囲に入るかどうか、截然たる区分けができないこともしばしばだった。それだけ文学研究が多様化しているということなのだろう。

2013年度で第一に挙げられるべきは『『ガリヴァー旅行記』徹底注釈』（岩波書店、2013.8）である。これは英文学研究の世界で一つの「事件」とも言うべき出版だ。富山太佳夫訳「本文篇」（2002年に「ユートピア旅行記叢書」第6巻として刊行されたもの）と原田範行、服部典之、武田将明の三氏による「注釈篇」の二冊が函入りになっている。驚くべきは、約600ページという膨大な「注釈篇」である。『ガリヴァー旅行記』が刺激に満ちた本であることはいまさら言うまでもないが、それが「つねに難題をもちかけては読者を困惑させ、物議をかもし、苛立たせ、ときには絶望させてもきた」ことも事実だ。「注釈篇」は、『ガリヴァー』が有する「豊饒な響き合いの、少なくともその一角でも明らかにすることを目的とし、作品の細部、それこそ一つの単語や文のレベルで、そこに宿る現実認識と想像力の機能について考察を加え、その成果を、史実考証やスウィフトの伝記的調査とともに、注釈の形でまとめたものである」（「はじめに」）。三名の注釈者の学識の広さと深さ、洞察の鋭敏さが随所に示される本書を読んで、ロバート・バートン『メランコリーの解剖』（1621）とノースロップ・フライ『批評の解剖』（1957）を想起させられた。この「注釈篇」はもはや注釈を超えた「アナトミー」であり、18世紀風にいえば「百科全書」とも言うべきものである。

オスカー・ワイルド関係の書籍が四冊あった。富士川義之・玉井暉・河内恵子編『オスカー・ワイルドの世界』（開文社出版、2013.5）は、32名による500ページ超という大部の論文集。内容は「Ⅰ ワイルドの作品」が8篇、「Ⅱ ワイルド文学の諸相」が10篇、「Ⅲ ワイルドと世紀末文化」が8篇、「Ⅳ 二一世紀のワイルド」が5篇。その他に、書誌と略年譜が付く。「まえがき」によると、本書は「ワイルドの作品と生涯を題材としながら、さまざまな観点から自由に論じ合う試み」であるという。これほどの規模になると玉石混淆となるのは避けがたいが、執筆者間の力量差が極端に目立つことはなく、ワイルドの全体像を捉えたものとなっている。富士川義之氏が最近のワ

回顧と展望

イルド研究を批判して、「最近の新解釈はどれもいささか賢しらずぎはしないか」、「作品自体の魅力とはほとんど無関係に論議が進行しているのではないか」（「愛他精神とデカダンス」）と述べていることに共感を覚える。宮崎かすみ『オスカー・ワイルド——「犯罪者」にして芸術家』（中公新書、2013.11）は、新書版とはいえ、平井博（1960）以来の日本語による本格的な評伝で、堅固なりサーチに立脚した内容は非常に充実している。著者は「同性愛をめぐる思想・文化史とワイルドの生涯とが交錯するドラマを描くこと」を目指している。本書の面白さは、もちろんワイルドという人間とその人生からおのずとあふれ出るものなのだが、それを丁寧に再構築していった著者の手腕によるところが大きい。角田信恵『オスカー・ワイルドにおける倒錯と逆説』（彩流社、2013.5）は、「ワイルドのテキストのありようを彼の性の政治学という側面から分析しようとする試み」とされている。クエア批評の枠組みにより、ワイルドの散文作品全体を、彼の実人生と絡ませつつ細密に論じる。木村克彦『ワイルドとペーター』（英光社、2013.10）は、唯美主義者としてのオスカー・ワイルドとウォルター・ペーターを比較対照したもの。二十年にわたる研究の成果とのことである。

他の個別作家研究の中では、中山徹『ジョイスの反美学——モダニズム批判としての『ユリシーズ』』（彩流社、2014.2）が力作である。著者によれば、モダニズムの歴史的な文脈を見ると、「美学と政治との結託と呼んでみたくなるもの」が「集中的に起こっている」。ところが実は、「モダニズム文学の金字塔と目される」ジョイスの『ユリシーズ』は、こうした「政治の美学化」に対する「大いなる不満の書」なのであり、著者はこれを「反美学の書」として読もうと試みる。その試みは「ジョイスの立場からモダニズムを否定するという意味」ではなく、「『ユリシーズ』の読解を通してモダニズムを理論的かつ歴史的に吟味するという意味」である。こうして、読者はモダニズムそのものの本質的議論にいきなされる。そこではカントはもちろんのこと、オスカー・ワイルド、ベンヤミン、ユージーン・サンドウ、ハヴロック・エリス、T・E・ヒューム、ロジャー・フライ、フレデリック・ジェイムスン、ポール・ド・マン等のさまざまな思索や試みが縦横に駆使されて、議論が進められる。最終的には、ジョイスの「反美学」は、「不在の「問い」」に対する「答え」なのだという結果が導き出される。

森松健介『バーバラ・ピム全貌』（音羽書房鶴見書店、2013.12）は、1913年生まれのピム生誕百周年記念出版と銘打たれている。知的諷刺と温和なユーモアにより、オースティンと対比されるピムの長編16篇と4篇の短編小説が紹介されている。1950年代にいくつかの長編を出版し、作家として認知されていたはずなのに、60年代から70年代にかけて、「時代遅れ」とされて出版社に受けつけられなくなったピムは、1977年にデイヴィッド・セシルとフィリップ・ラーキンによって「20世紀で最も過小評価されている作家」とされ、再度注目を浴びて復活した。ハーディ研究者として知られる著者によって、日本ではなじみの薄いこの作家の「全貌」が明らかにされている。

イギリス小説と批評の研究

ピムはたしかにもっと評価されてしかるべき作家だろうが、かといって、世紀を代表するような大作家でもない。とすれば、本書は空前にして絶後の本となるだろうから、それだけに大きな意義がある。各ページの最初に要を得た小見出しが付いていて、非常に読みやすくなっている。佐藤義夫編『オーウェルと旅』（音羽書房鶴見書店、2013.11）は、日本オーウェル協会が機関誌『オーウェル研究』第30号刊行を記念して企画した本。オーウェルの活動をほぼ年代順にたどる13名による文章が並ぶ。これを「論文集」と呼ぶのは不適切だろう。それは、「堅苦しいもの」にしたくないという編者の意図があって、「ルポ」や「創作」も入っているためである。20世紀前半という時代の旅人オーウェルの全体像が浮かび上がる。貝瀬英夫『日本の中のウォルター・スコット——その作品とライフスタイルの受容』（朝日出版社、2013.4）は、日本におけるスコットの受容を坪内逍遙、夏目漱石、さらに渡部昇一を中心にたどったもの。日常的な「仕事」と文筆活動を両立させたスコットのライフスタイルが与えた影響に力点が置かれている。他には、大社淑子『ミュリエル・スパークを読む』（水声社、2013.11）、高野秀夫『ジョージ・エリオットの異文化世界』（春風社、2014.2）、室谷洋三『アイリス・マードックと宮澤賢治の同質性——両者を結びつける絆 Rabindranath Tagore』（大学教育出版、2013.6）、竹野一雄編『C. S. ルイスの贈り物』（かんよう出版、2013.12）。

複数の作家を扱う本としては、平林美都子『「語り」は騙る——現代英語圏小説のフィクション』（彩流社、2014.3）がある。Eisuke Fujita, *Essays on Dickens, Forster, Austen: A Japanese Reader's Appreciation*（春風社、2013.12）は、藤田永祐『ディケンズ、フォスター、オースティン——いまに生きるイギリス小説』（春風社、2008）の英語版かと思われるが、扱われる作品に異同がある。

内容の広さと深さ、そして新しきで群を抜いているのは、大池真知子『エイズと文学——アフリカの女たちが書く性、愛、死』（世界思想社、2013.7）だ。HIV/エイズは、サハラ以南のアフリカ社会に深刻な事態を引き起こしている。著者によれば、「とりわけ脆弱な状況にあるのは女だ」。この地域のエイズ感染者の58パーセントは女性、中でも20歳から24歳までの若い女性の推定感染率は21パーセント（男性は7パーセント）である。「このような圧倒的な数字を前にして、私たちは問わざるをえない」と著者は言う。アフリカの人たちの「犠牲のもとに豊かさを享受して」きた「私たちに、いったい何ができるのだろうか」と。現実には、私たちの大半にとって、「遠いアフリカのことなど、自分とのかかわりを感じることもすら難しい」のが本音だ。文学の意義が生まれるのは、まさにそこである——「だからまず、遠いアフリカの人たちを、気持ちの上での隣人にすることが必要なのではないだろうか。……そしてそのための有効な一手段として、文学はある」（「はじめに」）。本書は四部構成で「エイズと文学」が語られていくのだが、とりわけ、第Ⅱ部「草の根の女が語るライフストーリー」で扱

回顧と展望

われるメモリーブックは読む者の心に深い印象を刻み込む。メモリーブックとは「HIVとともに生きる親が子どもへ宛てて書く」、出版もされない私的な小冊子だ。それが我々文学研究者に、文学とは何か、と根源的問いを投げかけてくるのである。

カルチュラル・スタディーズ関係で意欲的な出版が目立った。河野真太郎『〈田舎と都会〉の系譜学——二〇世紀イギリスと「文化」の地図』（ミネルヴァ書房、2013.5）は、タイトルから分かるようにレイモンド・ウィリアムズを中心として、20世紀イギリスの文化論を系譜学的に論じたもの。漱石の『三四郎』から始まって、コンラッド『闇の奥』、E・M・フォースター『ハワーズ・エンド』、ヴァージニア・ウルフ『ダロウェイ夫人』などが、ウィリアムズを軸として検討される。1960年代にSFの「新しい波」の旗手であったJ・G・バラードの『結晶世界』と『クラッシュ』、さらに「知られざる作家」ホープ・マーリーズをモダニズムあるいはモダン・モダニズムの系譜に位置づけたことには意義がある。本書の白眉は、それまでの議論が収斂していく第Ⅲ部「文化と自由の系譜学」だろう。新自由主義とポストフォーディズム（これらの用語の定義については、下に紹介する『批評キーワード辞典』を参照）という複雑な畏の中にはめ込まれている「我我の現在」を見事に脱構築してみせる。さらに、「(さまざまな形で現代人を巧妙に縛っている)制約との格闘」としての批評行為そのもののユートピア性を指摘して、希望をつなぎとめる。本書が現代の文化理論を縦横に駆使しつつも、(あまりに多くの前例にあるような)浅薄で空虚な知的遊戯に堕することがなく、切実で説得力ある「文化批評」たりえているのは、「序章」に述べられている著者自身の地誌学的移動体験とその背後にある現代文化状況についての鋭利な洞察があるためだ。

大貫隆史・河野真太郎・川端康雄編『文化と社会を読む 批評キーワード辞典』（研究社、2013.8）もまたカルチュラル・スタディーズの成果である。社会と文化を読み解く「批評の営為」（これは筆者の表現であることを断っておく）というものが始まったのは、おそらくコウルリッジあたりからだろう。それがカーライル、アーノルド、ラスキンを経て、二十世紀では、T・S・エリオット、F・R・リーヴィス等に受け継がれ、やがてレイモンド・ウィリアムズに到達したのだといえるのではないか。かつては批評の直接の対象は文学作品だったが、ウィリアムズとその継承者たちにとっては、社会と文化そのものが対象である。社会と文化——これほど巨大かつ複雑で捉えがたいものはない。いつの時代でもそうだったのだが、21世紀では、その複雑さのレベルは、ある限界を超えてしまったようだ。しかも、その理解を絶するものが、個人の生活にますます実質的な影響を与えつつある。病院の看護師と大学人が同じ「マネジメント」という言葉を口にする。就職活動の場で、あるいは英語教育行政の場で、「コミュニケーション」という言葉が洪水のようにあふれている。そして、そのような「言葉づかい」が病院の患者やら、大学の学生やら教員やらに直接的な影響を及ぼす。そ

イギリス小説と批評の研究

のような今だからこそ、社会と文化を読み解くための「批評の営為」が求められる。本書はウィリアムズ『キーワード辞典』(1976)を基盤としながらも、その内容は21世紀の今を先鋭に捉えたものである。大貫隆史氏の「はじめに」によれば、本書の目的は、文化や社会の現状、そしてそれを捉えようとする「様々なキーワードを読み解くことで、そうしたキーワードに現在染みこんでしまっている意味と価値を特定し、そして、新しい意味と価値を付与しようとする」とされている。構成は八つのテーマによる分類とその下位にある鍵マークのついたキーワードの大項目、さらにその下の小項目に別れている。もちろん「辞典」として使うことができるが(「索引」が「目次」の後に付いているので、これを参照するのが便利)、ウィリアムズの『キーワード』と同様、全体を通して読むべき本だろう。社会と文化の状況を「批評の営為」によって「読み解く」ことは、もしかしたら絶望に向かっているかもしれない世界を希望へと導く可能性を、たとえわずかでも、生み出すかもしれない。

山田雄三『ニューレフトと呼ばれたモダニストたち——英語圏モダニズムの政治と文学』(松柏社、2013.6)は、レイモンド・ウィリアムズを中軸的テキストとして、著者が「遅れてきたモダニスト」と呼ぶニューレフトたちの仕事を総括した本である。取り上げられるのは、F・R・リーヴィス、E・P・トムソン、ピーター・フラウの他、中野好夫、さらには水俣病にかかわる石牟礼道子とユージン・スミスである。1968年生まれの著者がモダニズムの歴史で重要な結節点である「一九六八年」を検証し、思索する第五章と第六章が興味深い。「三・一一福島」という「現実」のただ中において、ニューレフトがモダニズムという、定義しがたい巨大な「現実」と葛藤を繰り広げてきた歴史の検討は、切迫感が感じられる。まさに「生きている学問」としてのカルチュラル・スタディーズの最先端を走る著者の議論は深く鋭利に「現実」を抉っていく。

論文集では、阪大英文学会叢書第七巻、石田久・服部典之編『移動する英米文学』(英宝社、2013.12)が、平均的に質が高い。「移動」をテーマとして、イギリス文学10篇、アメリカ文学7篇の論文が収められている。橘幸子・森本道孝・市橋孝道・関良子・服部典之『〈アンチ〉エイジングと英米文学』(英宝社、2013.5)も同じく阪大関係の研究者による良質の論文が揃う。武井暁子・要田圭治・田中孝信編『ヴィクトリア朝の都市化と放浪者たち』(音羽書房鶴見書店、2013.9)は、堅実で奥が深い論文集であり、我が国におけるヴィクトリア朝文化研究が英米に伍するレベルであることを示す。他に、二十世紀英文学研究会編『二十世紀英文学研究X——英文学と他者』(金星堂、2014.3)がある。

入門書的なものとして、平出昌嗣『名作英米小説の読み方・楽しみ方』(学術出版会、2014.2)、白井義昭『読んで愉しむイギリス文学史入門』(春風社、2013.7)が出版された。我が国の大学から「英文科」が消えつつある中で、これらの本に依然として一定

回顧と展望

の需要があるとすれば、喜ぶべきことだろう。安井泉編『ルイス・キャロル ハンドブック——アリスの不思議な世界』（七つ森書館、2013.7）には写真などの図版が豊富に収録されている。

興味深い評伝が二冊刊行された。岡照雄『官僚ピープス氏の生活と意見』（みすず書房、2013.6）は、「出世が大事の官僚が直面する瑣事にあふれる『日記』のテキストと、その行間を読むことで、彼の生涯と英国の歴史の接点を観察し、推測して、一つの物語を組み立ててみたい」として書かれたものである。二千枚を超えるという著者の「ピープス・カード」の蓄積の上に立つもので、時代の大きなうねりと個人の瑣末な生活が絡み合う様が、実に面白い物語として語られている。一般読者は、『日記』そのものを読むよりも、本書を繙いた方がよいのではないかと。

富士川義之『ある文文学者の肖像——評伝・富士川英郎』（新書館、2014.3）は、英文学者が書いたものとはいえ、ここで取り上げるのがはたして適切かどうか、大いに迷う。本書はリルケの翻訳で知られたドイツ文学者でありながら、『江戸後期の詩人たち』や『菅茶山』という江戸時代後期の漢詩人群についての著作を代表作とする「文文学者」富士川英郎の評伝であるからだ。しかし、一読すれば、そもそも英文学だとかドイツ文学だとか、あるいは日本文学だとかの区別をすることの無意味を思い知らされる。ここには我々現代の文学研究者が忘れてしまったもの、あるいは意識的に捨象してしまったもの——何と表現すべきか、適切な言葉を選ぶのに窮するが、文学を愛することでもいうべきものが、実に生き生きと描かれているのだ。淡々とした語りながら、読者を引き込み、400ページ超をいつの間にか読ませてしまう力の源は、平明で上品な、香気漂う文体の魅力はもちろんだが、何よりも今や絶滅危惧種の「文文学者」の人生のありようそのものが、小さな感動を次々に積み重ねていくところにある。富士川英郎の生きた時代はなんと「文学的」であったことだろう。彼の学問は、「人文系の学問が各種の専門に細かく分化し、専門知を追いかけることに余念がない現代とは違って、学問がもっと大らかで、もっと事実即して、もっと人間味のある仕事であり、純粋な知識愛からなされる探索であり、一見縁のなさそうなもの同士を鋭い直感と洞察力と想像力によって結びつける作業であった時代のもの」（本書14章『失われたファウナ』）なのである。本書の中から一人の「文文学者」の気品あるたたずまいが静かに浮かび上がるとき、現代の文学研究者は過去半世紀の間に己が喪ったものの大きさを思い、立ちつくす。

ここで翻訳を取り上げる余裕は、本来はないのだが、メアリ・エリザベス・ブラッドンの *Lady Audley's Secret* の翻訳が二種——林清俊訳『オードリー夫人の秘密』（Kindle、2013.11）と三馬志伸訳『レイディ・オードリーの秘密』（近代文藝社、2014.3）——相次いで電子出版・出版されたことは、特筆に値する。ブラッドンの小説は、単にセンセーション・ノヴェルの最高傑作であるのみならず、文学史的にはかり

イギリス小説と批評の研究

しれない意義を持つ。ウィルキー・コリンズ『白衣の女』といえども、その足元にも及ばない。これは「家庭教師小説」なのか、ゴシック小説なのか、推理小説なのか——物語のテーマがジェンダー間の熾烈な闘争と狂気だとすれば、『ジェイン・エア』の鏡像なのか——いやいや、あまりの面白さにそんな理屈をこねる余裕などなくなるような小説なのだ。今まで翻訳がなかったのは実に不思議。手軽さを選ぶならキンドル版、美しい装丁の「本」を選ぶなら三馬版。特徴のある翻訳をさらに一つだけあげる。梅宮創造訳『『クリスマス・キャロル』前後』（大阪教育図書、2013.11）は、「クリスマス」を扱ったディケンズの作品いくつかを集めたもの。『クリスマス・キャロル』は通常版（と呼ぶべきか）と朗読版を共に訳出。訳者による「序」が充実している。

（東京女子大学教授）